

都築久義 (つづき・ひさよし)

昭和15年 愛知県安城市生まれ。
早稲田大学教育学部国文科卒業。
愛知淑徳大学教授

主要著書『実説人生劇場』(昭和47)

『戦時体制下の文学者』(昭和51)

『東海文学紀行』(昭和54)

『若き日の尾崎士郎』(昭和55)

『ふるさと文学紀行』(昭和57)

現住所 〒444-11 愛知県安城市姫小川町姫70

戦時下の文学

和泉選書23

昭和60年9月15日 初版第1刷発行©

定価 2500円

著者 都築久義

発行者 廣橋研三

印刷・明新社

製本 小幡製本

発行者 有限会社 和泉書院

〒543 大阪市天王寺区上之宮町7-6

電話 06-771-1467 振替 大阪7-15043

0422

ISBN4-87088-163-2 C1395 ￥2500E

戦時下の文学

都築久義 著

和泉選書

目次

戦時下の国策文学―序にかえて……………	5
戦時下の文学者……………	15
小林秀雄……………	16
太宰 治……………	32
高村光太郎……………	43
大岡昇平と中原中也……………	56
杉山平助……………	71
上田 広……………	104
棟田 博……………	128
ペン部隊の結成……………	149

戦時下の文学

尾崎士郎「人生劇場」

火野葦平「麦と兵隊」

井伏鱒二「花の町」

雑誌「文芸日本」

戦時下文学研究の動向と課題

戦時下文学の研究・参考文献目録

初出掲載誌

あとがき

戦時下の国策文学―序にかえて

文学者の従軍

昭和十二年七月七日、北京郊外の蘆溝橋附近で起きた日中両軍の軍事衝突は、当初「北支事変」とよばれ、国民の期待をになつてできなかったばかりの近衛文麿内閣は、事変不拡大・現地解決の方針をたて、ただちに停戦協定を成立させたが、その実施をめぐる再び緊張し、ついに日中両軍の全面戦争へと発展し、九月には名称も「支那事変」と改称された。

この間、政府は閣議で中国軍の不法行為と抗日的行為を批判し、華北への派兵声明を発表する一方、国内の各界の代表をあつめて国論の統一をはかり、挙国体制の確立の協力を要請し、国民にたいしては国民精神総動員計画実施要綱を示して、非常時を自覚せしめ消費の節約をよびかけた。さらに軍事国債の発行や臨時軍事費特別法を設けるなど、物心両面にわたる戦時体制の整備と強化を進め、十一月には宮中に大本営を設置し、ここに戦時体制が完全に敷かれたのである。

こうして政府が掲げた支那事変の遂行と勝利、国論の統一と挙国体制の確立という国策に、文壇がすみやかに反応を示し、やがて文学者がこれに協力し、ついには推進役をつとめるに至ったことは周知のとおりである。さきに述べた政府の各界への協力要請が行われたのは、七月十一日と十三日。十

一日には新聞通信社を招き、十三日には雑誌社の代表として中央公論社、改造社、日本評論社、文芸春秋社と懇談しているが、新聞社も雑誌社もこの協力要請に応えるかたちで、文学者を現地へ特派したのである。

その先陣を切ったのが東京日日新聞から派遣された吉川英治。八月三日にはやくも華北の天津へ飛び、入れ替りに木村毅が上海へ向かった。東京朝日新聞社からは少し遅れて出発したが、杉山平助が送られている。雑誌の方は『中央公論』が林房雄と尾崎士郎、『日本評論』が榊山潤、『文芸春秋』が岸田国士、『改造』が三好達治をそれぞれ特派し、八月下旬から九月にかけて戦地に出かけた。そして彼らはすぐに現地報告を送り、帰国してからも戦地ルポルタージュや関連の小説を発表して、文壇で話題と議論をよんだ。

まっさきに戦地に飛んだ文学者たちの現地報告文は、林房雄の「上海戦線」(『中央公論』昭12・10)や榊山潤の「砲火の上海を行く」(『日本評論』同)のように、戦地の情景を生々しく興奮して伝えたものや、尾崎士郎の「悲風千里」(『中央公論』同)のように、戦跡を巡って感慨にふけり、むしろ日本軍に占領された中国民衆に同情的な紀行文や、岸田国士の「北支物情」(『文芸春秋』昭12・12)のように、中国と中国人を理解しようとしたルポルタージュなど、その内容と筆者の姿勢はさまざまであったが、いずれも人びとの戦争と戦地への関心を高めたことはまちがいないだろう。以後、文学者たちの戦地行きは盛んになり、ジャーナリズムも競って現地ルポルタージュを載せた。

この現地報告の盛況を見た当局は、やがて文学者を動員する計画をたて、昭和十三年八月二十三

日、漢口攻略戦にいわゆるペン部隊を派遣すると発表した。人選は文芸家協会に依頼し、会長の菊池寛が中心になって行われ、吉川英治、岸田国士、瀧井孝作、深田久弥、北村小松、杉山平助、林芙美子、久米正雄、白井喬二、浅野晃、小島政二郎、佐藤惣之助、尾崎士郎、浜本浩、佐藤春夫、川口松太郎、丹羽文雄、吉屋信子、片岡鉄兵、中谷孝雄、菊池寛、富沢有為男の二十二名が選ばれた。

ペン部隊の計画が公表されるや、文壇の関心事はその是非よりも人選に集中し、参加者が発表されると人選をめぐってデマや中傷が飛びかった。マスコミがこの計画を大々的にとりあげ、選ばれた者をつつかりマスコミの寵児に仕立てあげたから、文壇に嫉妬や羨望がうずまいた。こうした派手な話題をふりまいた一行は、菊池寛を班長とする海軍班と久米正雄を班長とする陸軍班に分れ、陸軍班は九月十一日、海軍班は十四日にそれぞれ東京を発った。しかし、漢口攻略が予定どおりに進まず、ほとんどの参加者は陥落（十月二十六日）まえに帰った。漢口従軍の一行が帰国すると、長谷川伸ら大衆作家十人が、ペン部隊第二陣として海軍から派遣され、「南支」へ向かった。

出発まえはかまびすしい論議をよんだ部隊であったが、彼らの従軍報告の人気はさっぱりだった。人びとの関心と話題は火野葦平の「麦と兵隊」（『改造』昭13・8）に集中していたのである。戦場で現実に戦っている兵士の戦記が、傍観音の従軍記を圧倒したのは当然であろう。火野葦平の登場は、上田広、日比野士朗、棟田博らの兵隊作家を輩出させ、兵隊の手記や戦闘記録を氾濫させた。ペン部隊はマスコミと文壇を騒然とさせただけで成果はなく、皮肉にもその実態を暴露した尾崎士郎の「ある従軍部隊」（『中央公論』昭14・2）が話題になった程度である。

国策文学団体の結成

満州への農業移民が国策として計画され、それが実現していくのは昭和六年から七年にかけてであり、満州事変（昭和六年九月）と満州国の建国（昭和七年三月）が、その国策とふかきかわりあっていたことはいうまでもない。昭和七年十月、第一次試験移民団の四百五十人が渡り、以後、昭和十一年の第五次まで続いた。そして二・二六事件後に成立した広田弘毅内閣は、大陸への農業移民を最重要国策に掲げ、二十年で百万戸移住計画を決定し、翌十二年には第一期五ヶ年計画をスタートさせた。その矢先の事変の発生で計画どおりには進捗しなかったが、その後の内閣もこの国策を引き継ぎ、事変の発生は人びとの関心をいつそう大陸に向けた。

こうした時代の背景と要請にもとづいて誕生したのが、農民文学懇話会と大陸開拓文芸懇話会である。前者は時の農相有馬頼寧の肝煎りで昭和十三年十一月に発会し、後者は拓務省の幹施で翌十四年一月に発足した。両者がほぼ同時期に結成されたことについての影響関係はさだかではないが、おりから国家総動員法が施行（昭和十三年五月）されていたこともあって、政府や軍部の協力や後援を得た文学団体が、やがて続々と誕生する先駆けとなったことはまちがいない。ちなみに、文芸興亜会、少年文芸懇話会、国防文芸連盟、海洋文芸協会などが名乗りをあげた。

農村や農民を描いた小説には、古くは長塚節の「土」（明治四十三年）などがあり、大正末期には和田伝らが会員であった農民文芸会も組織され、プロレタリア文学陣営にも農民文学研究会が設置さ

れて、その伝統と水脈は連綿としているが、活況を呈してくるのは昭和十年前後からである。活躍の場を失った転向作家たちの活動が目立ち、伊藤永之介、島木健作、久保栄などが話題をよんだ。従来から地道に書き続けてきた和田伝の「沃土」も、第一回新潮社文芸賞（昭和十三年）を受賞して評判になった。

こういう気運に拍車をかけたのが、農民文学懇話会の結成である。生みの親ともいうべき有馬農相は発会式のあいさつで、〈農村文学にもまた「麦と兵隊」の生れ出ることを期待し、〈真に農村を救ふ国策をたてる原動力となつて欲しい〉と要請した。そしてこの期待と要請に応えて、同会はさつそく会員多数の作品を収めた『土の文学作品年鑑』（昭和十四年一月）を編んだ。それに前後して砂子屋書房が『新農民文学叢書』七巻、新潮社が『土の文学叢書』十巻を出し、中央公論社も『農民文学十人集』を刊行して、農民文学の盛況ぶりを示した。

それにしても、農民文学懇話会の会員には転向作家が多いことと、戦時下の国策農民文学を彼らが推進したことは興味深い。手なれた労働文学の手法を援用し、政治主義を転用することは容易であつたにちがいないし、従軍作家に採用される機会がほとんど閉ざされていた彼らにすれば、そこが前歴をとがめられずに活動できる場所でもあった。国策にそつて農民や農村の実態を報告しているかぎり、発表の舞台は与えられた。

大陸開拓文芸懇話会の方は、閉塞状況のなかで新天地に文学的題材を求め、そこに活路を見つけようとした若手たちが、縁故を頼つて拓務省などの関係者の間を奔走した。『文芸年鑑・一九三九年版』

には、荒木巍、伊藤整、福田清人、高見順の諸氏は拓務省梁井総務課長、有松東亜第一課長等の幹施で結成したと出ている。会長には岸田国土が就任したが、会員は彼らの文学なかまであった『人文文庫』や『行動』に拠った若手が多かった。同会も会員の作品を収めた『開拓地帯 大陸開拓小説』（昭和十四年十月）を発行したが、その事業内容として掲げていた『大陸開拓に資する優秀文芸作品の推薦又は授賞』や『大陸開拓事業の視察並に見学に対する便宜提供』の活動の方が顕著だった。大陸開拓事業は当時の豊村問題でもあったから、会員には両会に属した者もあり、分村問題をあつかった和田伝の『大日向村』（昭和十四年六月）は話題をよんだ作品である。

国策文学団体に所属して活発な動きを見せたのは、主として旧プロレタリア作家、気鋭の中堅・新人、そして兵隊作家たちであったが、全文壇を網羅して国策推進を展開したのが文芸銃後運動である。文芸家協会主催、文芸春秋社、大阪毎日・東京日日新聞社の後援で、全国各地を文学者たちが講演をして歩いたのである。その第一回が昭和十五年五月に開かれ、菊池寛、久米正雄、岸田国土、横光利一、吉川英治、中野実、林芙美子の七名が東海・近畿地方の八カ所で講演した。以後、ほぼ毎月一回行われ、太平洋戦争中も文芸報国運動講演会として続けられた。参加した文学者の数はのべ二百人にも達し、講演地域は樺太・朝鮮・台湾・満州にも及んだ。

太平洋戦争

昭和十五年、事変は四年めに入ったが、大陸での戦況は膠着状態を続け、欧州では第二次大戦が勃

発し、国内では内閣が半年ごと三人もかわるという時局をむかえていた。この難局を開きようとして、事変当初の首相だった近衛文磨は、全国民的に政治力を結集し、強力な政治体制を樹立し、事態を刷新しようと新体制運動を提唱し、枢密院議長を辞して自らその活動に乗りだした。困難な時局の打開策に手をこまねいていた各界の指導層は、この構想を歓迎し近衛の再度の登場を期待した。かくして昭和十五年七月に第二次近衛内閣がスタートしたのである。

近衛構想は現実化の過程で骨抜きにされていたが、既成の政党や政治団体はつぎつぎに解散し、政治体制の一元化をはかった大政翼賛会が十月に結成された。その初代文化部長に岸田国士が就任したことはあまりにも有名である。岸田は昭和十七年七月までつとめ、独文学者の高橋健二にかわった。大政翼賛会文化部が国策文化運動の中心的役割を果たしたのはいうまでもないが、内閣情報局も文化団体の統合整備も積極的にはたらかけた。

新体制運動にたいする文壇の対応もすばやく、第二次近衛内閣が成立してまもない九月に、文芸家協会はこの問題で懇談し、新体制準備委員会を設け、既成の文学団体によびかけた。その連絡協議機関たる日本文芸中央会を十月に発足させた。同様の動きは詩壇、歌壇、俳壇にもあって、やがて全文学者の統合一元組織である日本文学報国会へと発展していった。社団法人日本文学報国会が発足したのは昭和十七年六月十八日、「大東亜戦争」は半年まえに始まっていた。

日本文学報国会の成立事情や活動状況は、『文芸年鑑・二六〇三年版』（昭和十八年八月発行）に詳しいが、戸川貞雄は同書で「日本文学報国会は、政府の外郭団体、すなわち情報局第五部三課の指導監

督下に在る外廓団体であつて、常に国家の要請するところに従つて、国策の周知徹底、宣伝普及に挺身し、以て国策の施行実践に協力することを目的とする公益法人である」と明記している。会長は徳富蘇峰、事務局長には久米正雄が就任。同会が行なつた主な事業には大東亜文学者大会の開催（三回）、文芸報国運動講演会の実施のほか、「国民座右銘」や「愛国百人一首」の選定などがある。

大勢の文学者のもとに徴用令状が届き、行先きも任務も告げられぬままに、南方各地に輸送船で送られたのは、日本が米・英に宣戦を布告した昭和十六年十二月八日の直前であつた。同行したのは文芸家だけでなく、画家や写真家、映画人や放送人、新聞記者や編集者に宗教家までいた。陸海軍がいわゆる文化人を徴用して、報道班・宣伝部隊を編制したのである。開戦後も順次派遣しているので、正確な人数は把握できないが、さきの『文芸年鑑』には、〈軍報道部員として活躍せる作家氏名〉をあげ、〈馬來方面〉に会田毅以下十三名、〈ビルマ方面〉に倉島竹二郎以下九名、〈ジャワ・ボルネオ方面〉に大宅壮一以下十名、〈比島方面〉に沢村勉以下九名、〈海軍関係〉に石川達三以下十三名を記している。彼らはほぼ一年以内に帰還し、それぞれ現地報告や日記を寄稿したり刊行した。今次大戦で宣伝活動を重視した軍部は、このように文学者を動員して戦地で活用したほかに、軍部が編纂や監修をして戦記を刊行し、文学者や新聞社の報道班員を登用した。とくに海軍側にその傾向が顕著で、『大東亜戦争と帝国海軍』（昭和十七年五月）以下『海軍戦記』四巻を編纂し、『海軍報道班員現地報告 ハワイ・マレイ沖海戦』（同）以下『大東亜海戦記』五輯を監修し、逐次刊行した。ここは報道班員作家の戦況も載っている。

報道班員作家で脚光をあびたのは丹羽文雄で、第一次ソロモン海戦（昭和十七年八月八日）の従軍記は、九月一日の新聞にいつせいに掲載されて注目の的となった。報道班員作家のものとしては最初の従軍記であった。そのあと「海戦」（『中央公論』昭和17・11）や「報道班員の手記」（『改造』同）を発表し、前者は第二回中央公論社文芸賞を受賞した。

戦時下の文学者・知識人の動向で興味深いのは、中国を相手にしていたときにはいささか躊躇したり批判的であった者も少なくなかったが、米・英との戦いにはほとんどこぞって感激し、緒戦の戦果に快哉を叫んだことである。それは決して当局への思惑や軍部の圧力からではなかったはずだ。にもかかわらず敗戦となると戦時下の言動に口をぬぐった者のなんと多かったことか。その豹変もまた転向と同様に今後の文学的課題であろう。

戦時下の文学者